Voice of Design

日本デザイン機構

Japan Institute of Design

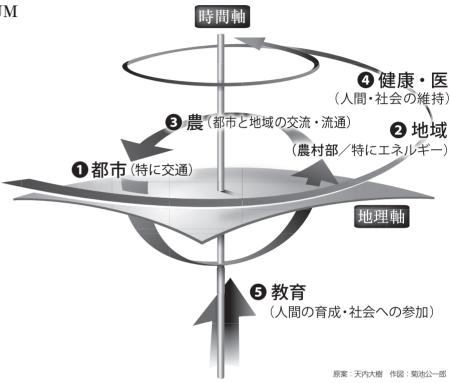
東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F 〒171-0033

San Ai Bldg. 2F 3-30-14 Takada Toshima-ku Tokyo 171-0033 Japan

Phone: 03-5958-2155 Fax: 03-5958-2156

http://www.voice-of-design.com E-mail:info@voice-of-design.com

特集 VOICE OF DESIGN FORUM 環境問題を文化で解く



目次

VOICE OF DESIGN FORUM 環境問題を文化で解く

5. 環境文化教育への提言

テーマ解題	2
開会挨拶 水野誠一	3
基調講演 「環境を考える」 栄久庵憲司	3
分科会	6
1. 都市のモビリティ文化への提言	
2. 地域エネルギー文化への提言	
3. 農文化への提言	
4. 健康・医文化への提言	

「環境問題を文化で解く」: テーマ解題

急務の課題である環境問題に対して、 我々はどのように行動したら良いのか。 COPによるCO2排出のガイドラインづく り、さらなるエコ技術開発、CO2排出権 取引やエコ減税などの政治経済的手法や 非化石燃料活用などの技術的な解決が 様々に提起されている。しかし、生活文 化への提案は多くない。こうした解決が

文化として定着したときに、未来への曙 光が見えるのではないか。そこを照らし だすことがデザインとの認識に立ち、こ のフォーラムでは環境問題を文化の視点 でとらえかえし、その背景にある自然観、 都市観、人間観などを軸に、次代の環境 文化への道を探る。

主題に従い「都市のモビリティ文化」 「地域エネルギー文化」「農文化」「健康・

Contents

事務局から

Special Issue: Voice of Design Forum Cultural Approaches to Solve **Environmental Issues**

Opening Address:Seiichi MIZUNO 3
Keynote Speech:Kenji EKUAN 3
Workshops 6
1. Cultural Proposals for Urban Mobility
2 Cultural Proposals for Local Energy

- 3. Cultural Proposals for Agriculture
- 4. Cultural Proposals for Health and Medical Care
- 5. Proposals for Environmental Cultural Education

From the Secretariat -----

Voice of Design Forum

Cultural Approaches to Solve Environmental Issues

What action should we take to solve the urgent environmental issues? The formulation of the quidelines on CO₂ emissions by COP, development of ecological technologies, political initiatives such as a tax reduction for the purchase of designated ecological products and trading of CO2 emissions quotas, a technological solution such as the use of non-fossil fuels are proposed. However, there are few cultural proposals for our lives. When we make such problem solution habits in our daily life, we may see a bright light in the future. Understanding that it is the role of designers to highlight this point, the Forum reviewed environmental issues from a cultural perspective, and explored paths to develop an environmental culture for coming generations around the axes of views on nature and cities with humans in the background.

Under the main theme, subthemes for workshop discussions were "Urban Mobility," "Local Energy," "Agriculture," "Health and Medical Care," and "Environmental Cultural Education."

医文化」「環境文化教育」の5つの分科会 テーマを設定した。

まず都市に農村的な安逸さを、また都 市以外の地域に都市的な便利さを求める よりも、役割を明確に分けようという発 想がある。それをふまえ、交通を切り口 に都市と環境問題の関わりを考える。ま た都市以外の地域での自然再生エネルギ ーを風土との関わりで考える。

そして農を生産地=農村、消費地=都市と一方向的に考えるのではなく、両者相互の関係(農業体験など人の交流、ブランド農産品など付加価値を高めた物流、二地域居住や祭礼などへの都市住民の関与)について農を取り巻く文化として考える。

また都市でもそれ以外のフィールドでも、生活する上での人間関係を保ちながら身体を保つ試みを「健康・医」と考える。

そして、そうしたサスティナブルな人間社会に、子供に限らず人々を誘い込むことを教育と考える。

都市と地域の地理的な「住み分け」、両者の交流としての農、そうした社会に人々を誘う教育とその社会の人々を長く維持する医、という5つの領域「環境問題を文化で解く」ことを仮説的に切り分けた。

なお本号は、フォーラムでの討議をベースに、講演者らの考察や写真・図版を加え再構成したものである。

VOICE OF DESIGN FORUM 環境問題を文化で解く

期日:2010年5月27日(木)

会場:国際文化会館(東京・六本木)

プログラム:

開会挨拶 水野誠一

日本デザイン機構理事長

基調講演 「環境を考える」栄久庵憲司

日本デザイン機構会長

分科会形式の検討会

- 1. 都市のモビリティ文化への提言
- 2. 地域エネルギー文化への提言
- 3. 農文化への提言
- 4. 健康・医文化への提言
- 5. 環境文化教育への提言



Date: May 27, 2010

Venue:

International House of Japan,

Roppongi, Tokyo

Program:

Opening Address by

Seiichi MIZUNO, Director General, JD

Keynote Speech by

Kenji EKUAN, Chairperson, JD

Workshop Discussions

- 1. Cultural Proposals for Urban Mobility
- 2. Cultural Proposals for Local Energy
- 3. Cultural Proposals for Agriculture
- 4. Cultural Proposals for Health and Medical Care
- 5. Proposals for Environmental Cultural Education



In "Urban Mobility," the relations between cities and environmental issues were considered alongside transportation systems. In "Local Energy," the restoration of nature in non-urban areas was discussed. In "Agriculture," interactive relations between rural and urban people (farming experience, value-added produce, dual residence in urban and rural settings, and involvement of city people in village festivals) were explored instead of dividing rural and urban areas as production sites and consumption sites.

Under "Health and Medical Care," maintaining one's own physical conditions while enjoying human relations was discussed. Under "Environmental Cultural Education," ways to lead people into sustainable society were explored.

Opening Address

Seiichi MIZUNO, director general of JD, president of IMA

The 20th century saw remarkable advancement in science, technology and economy. However, there remain the unsolved problems of human activities having exhausted natural resources, and having caused a heavy burden of environmental problems on the earth.

Currently, efforts are being made to solve these problems with the help of science and technology. The typical technology considered geoengineering. It is a technology which was employed before the Olympic Games in Beijing to shoot more than 1000 rockets into rain clouds so that it would not rain during the opening ceremony. Or, some people are seriously planning to develop a technology to scatter sulfurous acid gas above the stratosphere to cover the earth with a membrane as a means to prevent global warming. Sun rays would be reflected by the membrane and the air temperature of the earth would be lowered.

開会挨拶

水野誠一 日本デザイン機構理事長 IMA代表

20世紀は科学や技術や経済などの著しい進化の100年でした。 しかしその間に解決できなかった問題が、地球資源を蕩尽して しまったことと、環境問題という大きな負荷を地球に与えてし まったことだと思います。

今、その問題を科学や技術の力で解決しようとしています。 その最たる例がジオエンジニアリングでしょう。これは、例え ば、中国の北京オリンピックの開会式に雨が降らないよう、人 工消雨ロケットを一千発以上も撃ち込み雨雲を散らした、とい うような技術です。さらに、地球温暖化を防ぐために、成層圏上 に亜硫酸ガスを撒いて皮膜を作り、太陽光線を反射させて地球 の大気温度を下げる、という技術を開発しようとしています。

しかし、科学や技術で問題を無理矢理封じ込めるというこの やり方は、さらに新たな問題を引き起こそうとしています。な ぜならこの膜を作ると、地球から青空が見えなくなり、夕焼け の色は異常なほどに赤く血のような色に変わると言われています。そのため、既に人間の精神状態が異常を来すことを想定して、精神医学者もそのプロジェクトに参加していると言われる 問題を秘めた技術なのです。

このように環境問題は、「文明」だけで押さえ込むのではなくて「文化」的発想が重要です。夏に打ち水を打ち、簾や風鈴を下げて涼を感じる。モビリティで言えば、自転車をもっと都市内移動に使うとか、クルマを所有からシェアリングする方向に持っていくべきであるという、生活文化的な知恵が問題の解決に役立つのではないでしょうか。そういう期待から皆さんの叡智を集めたいという思いで、「環境問題を文化で解く」というテーマを掲げました。

多くの皆さんにこの議論に参加をしていただき、そこから出てくる問題意識を、ウェブを通じて大きく広げることを、私たちの今年一年の活動の核にしていきたいと思っています。

基調講演「環境を考える」

栄久庵憲司 日本デザイン機構会長



進歩のパラメータ この車椅子はGKでデザインしました (Fig. 1)。緑色にしたのは目立った方がいいと思ったからです。目立つなら赤色ですが、いろいろ考えて最後に辿り着いたのが緑色。私は、緑の杖を持っていたので、車椅子にもこの色をつけました。

最近、街なかをお年寄りが歩いているのをよく見かけます。 だいぶ日本も良くなったなと感じるようになりました。それで も銀座だとか渋谷だとか混雑したところにはあまり行かない。 そういうところへ行けるようになったら大変な進歩ですね。

進歩には、それを測るパラメータがいろいろあります。水や 資源がなくなるというパラメータもあります。渋谷や銀座など の混雑するところを年寄りが車椅子で、杖で平気で歩けるよう になることもパラメータです。大変な進歩、都市の改善になり ます。

このステッキホルダーはスウェーデン製です (Fig. 2)。スウェーデンではどこで売っているかというと荒物屋です。荒物屋で売っているというのは民度が高いのですね。一方、日本の荒物屋は、エイジドソサエティやハンディキャプトという人たちが行けるようになっているかどうか。恐らくノーです。これも一種のパラメータです。

制限のなかの創造 日本の人口は中国やインドの十数億に比べ

However, this method of forcefully controlling problems with science and technology may be likely to cause new problems. Because if this membrane were created, the blue sky would not be seen from the earth, and the sunset glow would look bloody red. Predicting that people will suffer mental breakdowns, it is said that psychiatrists are involved in the project.

As such, cultural consideration should also be given to environmental issues instead of control them only with the fruit of "civilization." Doing things like sprinkling water on the pavement, hanging reed screens and wind chimes to create a feeling of coolness in summer. Using bicycles more than cars to move around in a city. Lessening the number of motorcars in use by sharing them instead of owning them. Making use of the cultural wisdom that has grown out of people's daily living such as the above examples might help solve the problems. It was with this expectation, that the theme for the Forum was considered.

We would like to amplify our readers' views through our website.

Keynote speech: Thoughts on the Environment Kenji EKUAN, JD chairperson

* Parameters of progress

This wheelchair was designed by GK. Its color is green, because I thought the color is conspicuous. I had a green walking cane with me, so, I chose green for this wheelchair.

There are various parameters to measure progress. The exhaustion of water and resources is one, while the feasibility of elderly people moving in crowded downtown areas such as Shibuya and Ginza in a wheelchair or with a cane will be another parameter.

This cane is made in Sweden. I bought it at a sundries store. I wonder if sundries shops in Japan have this kind of cane for the elderly. This is also a parameter.







Fig.2 愛用の緑色のステッキとスウェーラン製ステッキホルダー

たら、その1/10以下。人数による国の力から言うと小国になって しまった。しかし小国の良さもあるのではないかと考えます。 例えば資源の問題で、資源がないならばないなりに発揮できる ことはないでしょうか。つまり制限です。制限を受けることに よって発揮できるということは何か。

日本は制限というのを非常に巧く活かした国で、足りないことによって創造的な目が生まれるというかたちをつくりました。例えば俳句は、「古池やかわず飛び込む水の音」と、たった17文字でできています。それであれだけの幽玄にして枯淡な表現ができるということは大変なものです。正岡子規の「柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺」では、時間・空間が出てきて、そして実感がある。俳句の中の写生派と呼ばれています。私もかつて「幕の内弁当の美学」(Fig. 3)ということを掲げました。幕の内弁当という限られた空間の中に無限の表情を出すということです。

制限というものが日本の国に希望をもたせる。今の時代は希望のない話ばかりですが、制限こそ我々の創造の基盤であると



Fig.3 幕の内弁当

思うことで、お互いの共通言語が出てくる。そこが大事です。非常に厳しい時代がきたからこそ我々はいいのだと。まさにこれからこそ日本文化が生まれてくる時期にきたと思いたい。

環境問題の実感 塩川正十郎さんをご存知と思いますが、彼にアンケートを出しました。一つは〈環境問題で個人として実感はありますか〉という質問です。すると「時々ある」という。まったくそうです。皆さんも実感が毎日一分一秒違わずあるというのはちょっと問題で、だいたいは「時々ある」です。「時々ある」とは「天候で温暖の差が乱れている時」「地震、津波等天災がある時」、「交通停滞でその影響を思う時」が「時々」に入るらしいです。

それから〈個人としての実践として何をしているか〉と聞くと、「近距離をできるだけ歩く」「階段は、もちろん非常に問題の対象である」。もう一つ面白いのは「冷暖房について非常に日頃配慮する」と。「冷暖房をつけた方がいいか消した方がいいか」とかを毎日考えていればボケない。また「今日は冷暖房をとめておく、あるいは今日は冷暖房をつけておく、そういうことを配慮している」と。

さらに〈先進的なことでやるにはどうしたらいいか〉という質問では、「発電事業にもっと原子力発電を使用すること」と。それから「戦争をすることは最大のエネルギーのロス」と。私が感心したのは、それによって環境問題を防いでいくということです。

実感する地球 環境問題というのは地球的に実感がないといけないのです。私たちがこうして座っている時に、水のないところ、汚染されたところ、そういうところを実感できるかどうか。 実感ができずになぜ環境論が言えるのでしょう。

例えば、最近感じたことでは、『枕草子』の「春は曙」はなかなか良い言葉です。自然観が非常にきれい。「夏は夜」では、蛍が飛んでいるのです。それで夏は夜。それから「秋は夕暮」。夕暮れに雁や鳥が飛び、段々小さくなり、山の端に隠れていく、そういう姿を見て「秋は夕暮」という。

千年以上昔の枕草子の清少納言という人はなかなかセンスの ある人です。そして最後の冬はとても雪白くと。とてもという

* Creativity out of paucity

The Japanese have displayed our creativity out of paucity and limitedness. *Haiku*, for example, is a 17-syllable poem. Within 17 syllables, we express the grand landscapes of different seasons.

l used to advocate the "aesthetics of *makunouchi bento*," a box lunch containing 10-15 different foods in small portions. In the limited size of a box, an infinite variety of expressions can be contained

Paucity or limitedness is the source of creations for us. We are listening discouraging news these days, but in a way, we are at a good time to take advantage of Japanese culture.

* Realistic perception on environmental issues

I sent a questionnaire to Mr. Masajuro Shiokawa, former Minister of Finance asking what he thought about environmental issues. He replied "I think about environmental issues sometimes," to the

question "Do you seriously consider environmental issues?" This is a common feeling among people, as not everyone is concerned about the environment all the time.

When asked "What are you doing personally to save energy?" he replied "I walk for short distances, and walk up and down the staircases." And "I always think whether to switch on the airconditioner before using the remote controller." To the question, "What can we do to solve issues with advanced technology?" his answer was "To use more nuclear power plants for electricity." He added "War causes the greatest energy loss," and suggested that the absence of war is a preventive measure for environmental issues. For this, nations around the world should have a strong will not to wage a war. The United Nations is meant for this, but it has become a forum for countries to seek and insist on national interests.

* Education to know about the earth

のは不思議な言葉ですけど、雪が降り注いで、そして霜が白くなっているというのは大変味わいがある、ということを言っているのです。文学というのは千年以上も前から永々と自然観をつなげてくれているのです。「あ、春はいいなあ」「夏は暑いなあ、しかし蛍が飛ぶときれいだな」「冬は寒いなあ」と思う感性をいつともなしか得ているわけです。そういう感性、実感を自分らの国の中だけなら分かるけど、どうしたら世界につなげられるかが、非常に重要なことだと思うのです。

地球を知る教育 地球というのは結構大きい。地球というものを、どうやって自分のものにするか。例えば、藩に対した時に国家という目に見えないものを論じた連中がいたように、今は日本国だけどしかし地球が感じられる、日本にいながら地球を感じられるにはどうしたらいいか。実感がなかったらどんな論理もアウトです。

そういう面では、白人社会は意外と実感が強いのです。というのは世界航海や植民地対策をしたりしたので。そういう意味で特に実感が強く感じられるのは華僑です。華僑はともかく行った先で町ができるのです。子どもを産むのですね。そして、子どもが育って町ができ、中国語で話し合う。体で、肉体をもって地球を知ろうという、結果的にそういう感じがします。その意味で、今我々が非常に大事な問題の一つとした「実感」をする術を考えないといけない。そういう点からの提案としては、やはりプロモーション、教育です。

教育は非常に大事なことではないか。我々も戦国時代の話しは全然知りませんが、教育によって戦国時代がどんな時代であったかを知るのですね。また、千年昔はどうであったかを知るのです。そういう面で、教育というもので地球を知るという方法があるのではないでしょうか。

これは子どもにとっても重要なことですし、どういうふうに 教科書が書き換えられていくか、という点からも教育は一つの 提案です。どういう態度で知るかということは、極めて難しい のですけど、しかしそれを知らなければ国家が分かれているだ けで地球が一つにならないのです。 **知行合** 「知行合一」という言葉があります。「知ったならば行なえ」と。これは日本の禅文化の基本みたいなものですが、「知行」、つまり「知ることと行なうこと」が一致しなければいけない。知行が合一しないところに戦後の非常なマズさがあるのです。ここで話されたことは実際にやらないといけません。

私の家でも、ソーラーパネルを屋根に葺きました。みんなに見てもらおうと思ったのです。でも、道に近いものですから屋根の上は見えないのですね。せっかくソーラーエナジーのパネルを貼ったのにということで多少がっかりしているのですけど。こういうパネルを知ってもらい、一人でも近所の家がソーラーパネルをつけてくれるようになればいいなと思ったのですが、補助金などが徹底していないせいか、なかなかできていないようです。それも、あえて大げさな言い方ですけど「知行合一」なのです。

これは自分自身のことですが、自動車の悪口ばかり言っていたのです。私自身、自動車などの工業製品のデザイナーのくせに。しかし私は今や、自動車がなければ出歩けないのです。ここまで来るのも自動車があったから来られたのです。自動車がなかったら来られない。かつてのような自動車は炭酸ガスを噴き出してどうしようもない、都市の汚染の張本人だと言って、悪口をいっぱい書いていましたけど、今や自動車をなくしては一日も暮らせない。不思議な話しですけど、反省の意味も込めて。

キーノートには恐らくならないかもしれませんが、気持ちだけを察していただければと思います。



In Makuranososhi (Pillow Book), essay collections written by Seisho Nagon in the 10th-11th centuries, there are phrases appreciating the best time of every season. "Dawn in spring, night in summer, twilight time in autumn, and snowy daytime in winter" describing the scenery of each time. We, Japanese people, have passed on the same view of nature for more than 1000 years. It is important for us to apply this sense of nature to understand other countries. Or, we need to acquire the means to understand the earth while living in Japan. It is education that provides us with such a means. Education is particularly essential for children.

* Unity of Knowledge and Action

A basic teaching in Zen Buddhism is the "unity of knowledge and action." As an effort to put this into practice, I installed solar panels on the roof of my house. I intended to show them to my neighbors to help them become interested in the benefits of installing solar

panels. This is my way of uniting knowledge and action.

* Automobiles

Even though I am a designer of vehicles and other industrial products, I have criticized automobiles and their emissions as a major source of pollution in cities. However, as I got older, I became unable to move around without a automobile. Therefore, now, I am reconsidering the value of automobiles.

VOICE OF DESIGN FORUM 分科会

都市のモビリティ文化への提言

コーディネータ報告 森口将之

「環境問題を文化で解く」というテーマでありながら、エコという言葉をほとんど使わないまま分科会を終えてしまったことに後で気づいた。しかし文化を軸に環境を語るのであれば、それでよかったのではないかと今は思っている。

乗り物とは、人間が自己のエネルギーを使って行ってきた移動を、外部のエネルギーを利用することで、より速く、楽に移動できるようにした機械のことである。文明の利器の典型ということができるだろう。

乗り物の登場によって、モビリティの 可能性が大きく発展したことは事実であ る。1日あれば地球の裏側まで行けるよ うになった。しかしながら近年、過度な 文明への依存が、環境破壊を引き起こし つつあるのも事実である。

だからこそ、文化的なモビリティを追求すれば、自然とエコに結実するのではないかと勝手に想像し、フォーラムに臨んだ。どうやらそれが完全な間違いではなかったことに安堵している。

都市を移動する乗り物をCO₂排出量の 多い順に並べると、自家用車、バス、電車、 自転車となる。実はこれ、人間が安楽に 移動できる順番でもある。電気自動車や

参加者

森口将之 (コーディネータ,自動車ジャーナリスト)、一条厚 (GKダイナミックス)、車戸城二 (記録,竹中工務店)、長澤章 (日刊建設通信新聞社)、羽田隆志 (HSVP理事長・静岡文化芸術大学)、中村慶之介 (オリエンタルコンサルタンツ)、大隈哲 (日建設計)、浜田拓郎 (旅行・交通ジャーナリスト)、野上耕太郎 (早稲田大学学生)、大石春奈 (青山学院大学学生)

太陽光発電がまだ一般化していない現時 点においては、内燃機関や発電所が作り 出すエネルギーを個々の人間のエネルギ ーで置き換えていくことが、環境悪化を 食い止めるという公式が成り立つ。

そう考えると、分科会でも議論の主役になった自転車が、文化的なモビリティの構築にふさわしい存在ではないかと思えてくる。しかし日本では、自転車専用道路がない、鉄道車両に乗せられないなど、文明の利器の効率性を優先した状況から脱却できない。欧州の事例を手本に、自転車が他の乗り物と共存した社会の構築を、早急に実現したいものである。

今回は世代間でモビリティに対する考えの違いが垣間見えた点も興味深かった。高度成長期に青春時代を送った人々は、どうしても自動車が豊かさの象徴であるという意識から抜け出せないでいるが、現在の学生は逆に自転車こそが豊かな乗り物だと捉えている事実に驚くとともに、今後のモビリティを語るには若い人たちの感性が重要であることを教えられた。

ただ分科会を進めるにあたり、自転車、 自動車、鉄道と乗り物別の議論になりが ちだったことは反省しなければならな い。これこそ文明的視点から抜け出せていない証拠であり、モビリティを文化的な角度から改革するには、もっと人間や地域の側から観察することを心掛けるべきだと認識した。

分科会の話題から

パラダイムシフトする自動車交通

まず、コーディネータの森口将之氏より本分科会の主旨説明を説明、各参加者の意見を求めた。冒頭、水野JD理事長より所有から使用へというホロデザインの視点からのパラダイムシフトの指摘と共に、自動車本体の話ではなく、交通システムと価値観の変革が議論のベースとして提案された。

これに対し参加者からはCO₂排出や、都市構造の観点から現在の自動車交通のあり方に夫々の立場から批判が寄せられた。自動車交通をある程度都市から排除する方法、クルマが都市のあり方と既に密接に結びついている以上、都市構造から見直す必要があるという指摘、クルマのための歩道橋が都市を分断してしまっているので元に戻そうとする運動、局面毎で相応しい多様な交通手段を混ぜてしま

Workshops

1. Cultural Proposals for Urban Mobility Comments by Coordinator Masayuki MORIGUCHI

Vehicles in cities can be listed according to the amount of their CO₂ emissions as follows, automobiles, buses, electric trains and bicycles. This is also the order that people can travel easily. As electric automobiles and solar energy are not yet commonly used, the best way to stop environmental deterioration is to apply more individual human energy in place of the energies generated by power plants and engines.

From this viewpoint, bicycles seem to be the most appropriate means of mobility in a cultural context. However, in Japan, we have very limited lanes specified for bicycles, and we cannot take bicycles on the train. We need to develop a transportation system in which bicycles can be accommodated more easily.

Regretfully, our discussion focused on different vehicles such as bicycles, automobiles, and railway trains separately. This fact proves that we are not able to free ourselves from a systematized point of view in considering mobility. In order to reform our transportation system from a cultural aspect, we need to examine it from people and community points of view.

Discussion

* Automobiles undergoing a paradigm shift

Participants evaluated the present automobile traffic from the levels of CO₂ emissions and urban structures. Their opinions included the means to reduce motorcars from cities, the need to restructure cities in order to reduce automobiles, the need to remove pedestrian overpasses as they are dividing cityscapes, and mixing different means of transportation to suit particular conditions.

う方がいいのではないかという指摘など。 また、地方での公共交通の貧弱さや、 私たち自身に染み付いた「自動車を前提 とした発想」自体が問題であるとの意見 もあった。さらに今後の交通を考える場 合は、現状の問題を解決するというより、 その次に来るべき交通のあり方を考える べきだという指摘があった。

文明は理由があって発生し、求めがあって発展してきている以上、その理由の部分、つまり私たちの価値観の側に新しい提案が必要だと思える議論であった。

自転車の可能性と交通のシームレスネス

次に交通手段として局面的に自動車に 代替する自転車について議論があった。 まず文明は発生時点ではそれ相応の理由 があったが、その後システムが構築され ると、システム自体が無批判に自走して いることで問題を起しているとの認識に 基づき、自転車が持つ非自走性こそ重要 な性質ではないかとの指摘があった。

文明は利便性をもたらしたがそれによって失ったものもある。自動車の利便性 を少し犠牲にして自転車にしてみると、



ミュンヘン地下鉄

見えなくなっていた風景に気づき始める。利便性が必ずしも豊かさではない以上、そのバランスが大切だと思えるようになってくる。

ではクルマの利便性を越える瞬間とは どういうものか。まずシームレスな交通 体系があれば、クルマに頼らなくても高 い利便性を獲得できる。海外ではおなじ みの自転車を乗せられる電車や富山の新 幹線駅→LRT→駐輪場というシステム等 は、クルマの持つドアツードアの利便性 に近いシームレスな交通を実現する。自 転車専用道路、混在するシステムを許容 する互いが思い遣る寛容な文化、あるい は使いやすいローテクなインターフェー スといったものも自動車の利便性を補う との指摘があった。

既に変わりつつある価値観と新しい発想

これまでは自動車がかっこいい乗り物だったのに対し、今の学生にアンケートをとると、自転車がこれに替わりつつある。多くの人が共通に憧れる対象としての自動車ではなくなってきている。価値観は既に替わり始めている。そうであれ



パリの公共自転車ヴェリブ

ば、都市も自転車で走りたくなるように 作ればもっと自転車は増えていくはずだ という指摘があった。つまりどの交通手 段が便利か、優れているかというより、 環境がどの手段にマッチしているかマッ チさせるかという視点である。クルマ以 外にオートバイ、電車、自転車等ほとん ど全ての製品を生産しているこの国は、 これらの多様な手段のシームレスな連携 や総体としてのシステムを構築できる最 も相応しい国ではないかと言うのだ。そ れを自認し、進めていくべきだと。

郊外の貧弱な公共交通にしても、よく 見るとその田舎道を走り回っているクル マはいろいろある。宅配や郵便や集金な ど。そうしたクルマが法律の縦割りを超 えて地域住民にサービスすれば、大きな 交通資源となるのではないか。

また、究極には都市と郊外の密度のメリハリがはっきりしたコンパクトシティを織り込んだ国土計画のヴィジョンがあれば、交通への負担は低減されエネルギーも環境も快適性も実現させることができるのではないか。そうした議論で締めくくられた。(車戸城二)



パリのバスとバイクのレーン

Some pointed to poor public transportation systems in the rural areas, our fixed "automobile-first" concept, and the need to consider future transportation instead of trying to solve current problems.

* Potentiality of bicycles and seamless traffic systems

The feasibility of bicycles to replace automobiles partially as a means of transportation was discussed. If there were a seamless transportation system, people would be able to enjoy convenience without depending on automobiles. Trains allowing passengers to bring in their bicycles, and the link of Shinkansen + LRT + bicycle parking lots as seen in Toyama are feasible examples to realize a seamless transportation system.

* Changing values and new concepts

Until recently, automobiles were cool vehicles that many people

admired, but young people nowadays are more interested in bicycles. If cities were more bicycle-friendly, there would be more bicycle users. This suggests that we need to consider what means of transportation are suitable to a particular environment or how we should choose appropriate transportation means for different environments, instead of considering what means are convenient and superior. As we can manufacture almost all transportation devices, we can build various transportation systems including a seamless system. Even in rural areas with poor public transportation systems, delivery service trucks, postal trucks and other business cars are running. If restrictions by law were relaxed, they could provide services for people in villages, they could become useful transportation resources. If there were a clear vision of the land use containing compact cities, burden on transportation would be reduced, resulting in less energy use and greater amenities. (George KURUMADO)

VOICE OF DESIGN FORUM 分科会

地域エネルギー文化への提言

コーディネータ報告 佐々木歳郎

「文明」が人類視点を基盤とするのに対して、「文化」は民族と風土を基盤とした"人々の生きるかたち"であり、生活習慣や暮らしの知恵、風景や景観、色彩や香りの感性として現れる。つまり"地域エネルギーを文化で解く"とは、人々の暮らしや感性の視点からエネルギー問題を考えるということである。

現代の社会や暮らしは、文明としての エネルギーとその利用システムに依存し ている。ガラスとコンクリートで外界か ら隔離され、空調システムによって快適 に保たれた部屋で大画面テレビを楽しん でいるとき、私たちは目に見えないエネ ルギー文明の恩恵に浴しているが、地球 温暖化の問題は、こうしたいわば不可視 なエネルギーによる人工的な快適さの追 求とトレードオフの関係にある。

我が国の温暖化対策は、2020年までに1990年比25%減という温室効果ガス削減目標を踏まえて、理念から実効性ある対策へと進みつつある。しかし、昨年、環境省から発表された「2008年度温室効果ガス排出量」の部門別推移によると、1990年に比べて産業部門が13%の減少であるのに対して、家庭部門は約35%の増加となっている。核家族化による世帯数の増

参加者

佐々木歳郎(コーディネータ,公益事業コンサルタント)、伊坂正人(記録,日本デザイン機構)、薄井滋(グラフィックデザイナー)、佐野正(佐野デザイン事務所)、木村雅彦(GKグラフィックス)、七字祐介(日本建築美術工芸協会)、檜垣泰仁(エスケー化研)、根本千明(青山学院大学学生)

加も排出量増加の一因であるが、人工的な快適さを求め続けることが限界に来ていることも否定できない。低炭素社会の実現には、低炭素型の製品・技術の導入だけでなく、ライフスタイルの転換が求められている。

「環境共生社会」というキーワードが時代の潮流として語られているが、半世紀前までの日本では、人々の生活を取り巻くごく普通の景色、風土であり、その中から日本的な様々な習慣や感性が生まれて来た。小川のせせらぎの音で春の訪れを知り、夏は打ち水で涼をとり、夏建具で風を呼び込む。風鈴の音色に涼しさを感じ、風にゆれるススキに秋を感じる。ここには、現代でいう「自然エネルギー」と生活の関わりが可視化されている。

エネルギーをめぐる文明と文化の折り合いの鍵は、日本人が忘れかけた自然とのつきあい方の感性と知恵にある。日常生活におけるちょっとした"風情"や技術における"自然を活かす知恵"、地域の多様な気候風土を踏まえた地域資産としての自然エネルギーの掘り起こしなど、暮らしの中でのエネルギーの可視化作業が必要である。エネルギーという分野は日常的に馴染みがないが、分科会での議論

をとおして、日本人にとって「自然とのつきあいは自然エネルギーとの関わり方」であったという、ひとつの気づきに結びついたことは大きな成果だといえる。

低炭素社会は、<エネルギー = 自然との関係性>という再定義を出発点とすることで、デザイン分野を含めた新しいかたちを見い出していけるのではないだろうか。

分科会の話題から

エネルギー技術の巨大化への対応

10年ほど前までエネルギー問題は、経済産業省的な政策テーマとして捉えられていたが、最近は「地球温暖化」「生物多様性」などをふまえ、身近な環境問題の重要な要素となってきた。

環境とエネルギーは表裏一体の関係に ある。今日のエネルギー獲得の技術は、 化石燃料などの在来のものや風力・太陽 光といった新エネルギーも巨大化し、環 境に対する弊害も出てきている。そこに 違った視点が要る。

低炭素化の流れの中で電力となり、 その需要に100%応えるには原子力発電

2. Cultural Proposals for Local Energy Comments by Coordinator Toshiro SASAKI

Modern living depends on energy and energy-use systems. Global warming occurred as a trade-off for our desire for man-made comfort provided by invisible modern energy.

Japan aims to reduce green-house gas emissions by 25 percent of the 1990 level by 2020. Last year, the Ministry of the Environment published "The Report on Green House Gas Emissions for 2008." Although the emissions by industry fell by 13 percent from 1990, the volume of emissions from households increased by 35 percent. For a low carbon society, not only technological advancement but also a shift in people's lifestyle is required.

"Living in harmony with the environment" is often talked about. But in Japan until a half century ago, it was a matter of course. Various customs and traditions were developed through living in harmony with nature. Tools to mitigate heat in summer and coldness in winter were devised. A key for taking a cultural approach to the energy problem is to recall our traditional wisdom to get along with nature. Being sensitive to and taking pleasure in nature and the wisdom to make use of nature and find natural energy sources in one's locality will be needed.

Considering that the low carbon society is to be a society in which relations between energy and nature are redefined, we may be able to find new aspects in all fields including design.

Discussion

* Expanding the scale of energy generation

To meet energy demand in a low carbon society, nuclear power plants may be a good choice. But we should not choose this. Then, the use of regenerated natural energy such as winds, geothermal energy, solar, and water will be realistic. But this choice is largely をということになるが、それをしてはならない。そこで、風、地熱、太陽光、水などを利用する自然再生エネルギーの活用が現実的だが、地域の特性の影響を大きく受ける。日本は地形的に多種の自然エネルギーを、多様な地域に擁する実験場の様なところがある。そうしたものの巨大技術化、例えば三保の松原に林立する風力発電、休耕田に敷きつめられた太陽光パネルなどは、はたして我々日本人の感性として許せるものかどうか。

エネルギーの見える化

エネルギーは「見えない」という問題がある。電気に頼るとますますの感がある。マンションの様に隔離された住環境で見えない電力を消費しているのでは、実感できない。使用感が乏しい上に、入手が官まかせである。裏山に往き柴を刈る、それを燃やす、そのような個人の自立性が可視化ということだろう。そのような実感化、実体験から文化が生まれてくる。

国家目標のCO₂削減25%がある。産業界は1990年以降工場、生産設備の削減が進んでおり、CO₂が増加しているのはオフィスや住宅である。特に住宅は40%も増加しており国家目標の達成は無理。実感がないから使ってしまう。電気代を値上げして、高くすれば使わないというのは、文化とはいえない。

エネルギーに関しては、供給源の巨大 化と細分化された消費源との間の運搬の ロスが見逃せない。医療をはじめ一般生 活も同様だが、エネルギーの場合更に「よく見えない」という点が加わる。可視化することが大切だ。

地域固有の風土と結びついたエネルギー

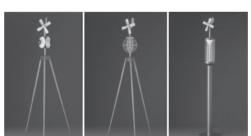
地域・エネルギー・文化と投げかけた 意味を考えると、例えばダムなどの巨大 開発が文化に取り返しのつかない影響を 与えることを充分に認識する必要がある。

その地域固有の風土と人とが結び付いて最適なエネルギーを獲得する為に文化的な視野が要る。その地域で生み出すエネルギーがあれば、他から供給される電力やガスに依存しないで済む。その分、文化的に生活が出来るということになる。庄内町(旧立川町)は風力発電から、籾殻や糞尿などマイクログリッドでいろいろと努力をしている。

静岡文化芸術大学で直径30センチ程度の風力発電機の応用デザインをしている(Fig. 1)。太陽光パネルやマイクロ水力発電など、複合して地域の風景として定着出来るかどうかが課題となる。

くらしの伝統文化を現代の視点で見直す

日本人のエネルギー利用の知恵として



受け継がれてきた文化の形に「京町家」を挙げることができる。しかし、町家の生活を現代にそのまま持ってくるには疑問もある。違った例で言えば北山杉、これは今のマンションの生活様式には北山杉の磨き丸太は不要で、それを次世代に伝えるというのはリアリティがない。一方で現代的なものであるソーラーパネルなどはハードのデザインとして、洗練されてなく、デザインの力でもっと美感、使い勝手を含めて考慮の余地がある。感性(文化)を次世代に伝えるリアリティの問題と、機械(文明)そのものの洗練の余地の2面で考える必要がある。

「地域」「エネルギー」「文化」という3つのキーワードで結んで議論するのは、新鮮だが実感の掴みづらい重いテーマだ。ノスタルジックな夕涼み、打ち水、日溜まりなどの実感は記憶として持っているが、現実の快適な住空間の中にあって、地域の資源を活かしていくとっかかりを模索中である。過去へと戻るのは現実的ではないが、かといって人工的に完全空調の空間は、エネルギー効率が良くても、「味気なさ」がある。文化と文明を二律背反ではなく、どこかで折り合いを持つこ

とができるよう、その実感を見つけていく作業が大切だ。(伊坂正人)

Fig. 1 小型風力発電利用照明

affected by local features. Topologically, Japan is gifted with these natural sources. But can we stand having windmills for electricity aligned along scenic beaches, and solar panels filling the spaces of unused paddy fields?

* Visualizing energy

Energy, particularly electricity, is invisible, so we use it a lot before we know. If its rate is raised, we may try to limit our use. The volume of energy lost in the course of transmission from plants to individual users should not be overlooked. But it is also invisible. We need to visualize our energy use (and loss).

* Energy generation and local features

The construction of a large dam can exert irreversible effects on local culture. A cultural perspective is required to obtain appropriate energy suited to the land and people of a locality. If

energy can be generated within one's locality, people can live without depending on electricity and gas supplied from other cities. Shonai town is making every effort using windmills, rice hulls and animal excretions to generate its own energy sources.

* Reviewing traditional culture from a modern viewpoint

A merchant house in Kyoto is a model of using natural energy for comfortable living. But, this cannot be transported to condominiums in cities. However, at least a part of Japanese-style houses can be introduced to them to help young people feel the flavor of traditional living. (Masato ISAKA)

VOICE OF DESIGN FORUM 分科会 農文化への提言

コーディネータ報告 迫田幸雄

農文化分科会には多彩な方々に参加いただいた。先ず、会員以外で、VODのURLを見て参加された農業に特に関係ある金融機関の研究者、農業関係出版社にお勤めの方、実家が山梨の葡萄農家のデザイナー、故郷の福岡で農業を身近に見聞きしてきた、東京で学ぶ大学生に加えて、農に関心を持つ会員各氏である。改めて御礼申し上げたい。

限られた時間だったので、我国農業の 世界での位置付けについて思いいたす発 言までには至らなかったが、それは無理 もない。日本の農業は駄目だとか、食料自 給率は先進国中で最低だとかのマイナス の話ばかりを聞かされているのだから、 日本の農産物の海外での評価が思ったよ りもずっと高いことなどを時折知ると、 珍しいことのように驚くか、まんざらで もない気分になる程度だろう。例えば、山 梨の葡萄や長野のリンゴはタイや台湾で は珍しいおいしい安全な果物として、関 税などの様々な課金がついて日本の3倍も の値段になるにも関わらず、人気があり よく売れるとのこと。福岡のイチゴ「あま おう」を札幌に運ぶより、台北、上海、ソウ ルのほうが近い。これらの都市には近郊 から安くておいしいイチゴが入るにも関

参加者

追田幸雄 (コーディネータ, インダストリアルデザイナー)、鴨志田厚子 (インダストリアルデザイナー)、佐野邦雄 (インダストリアルデザイナー)、谷口正和 (ジャパンライフデザインシステムズ)、矢後真由美 (記録, Teable)、光田愛 (bell-table)、石山篤 (造形作家)、手塚功 (GKグラフィックス)、高須順子 (農業技術通信社)、安藤範親 (農林中金総合研究所)、尾内綾 (青山学院大学学生)

わらず、日本産の「安全・美味」の浸透に よって、高値をものともせず買う人がい る。もはや品質が「文化」にまでなってい るといえよう。十数年をかけて品種 (brand) 改良を重ね産出する成果は単な るモノを超えているのではないだろうか。

日本のイチゴ市場が品薄になる時期に 輸入される韓国産「章姫」「レッドパール」 は日本が開発した品種だが、無許可で株 分けされ、韓国中に拡がっている。日本農 家はロイヤリティーを求めたが、韓国農 家は額が高すぎるとして決裂した。これ はただ乗りはゆるすまじと日本政府が踏 ん張って解決すべき案件であろう。

世界に広まる和食もそうではないだろうか。我国政府関係の団体がどこかの国のタイヤメーカーを真似して海外の和食レストランの格付けめいたことをしようという記事を読んだことがあるが、そんな上からの視点ではなく、よりおいしくヘルシーな和食を作る懇切丁寧なノウハウと、その背景の文化を輸出することこそ大切だと思う。その基礎となる「ごはん」文化と、それを支えるおいしい、他国が真似のできない日本のお米を誇りをもって広める絶好の時機であろう。

分科会の話題から

農に関する様々な見方・課題

コーディネータの迫田幸雄氏より、本 分科会についての説明ののち、本誌の前 号 (vol.15-2) でも特集を組んで「農とデザ イン」の関係について深く言及したなど、 このテーマに関するこれまでの経緯をお 話いただいた。この「農とデザイン」をテ ーマとしたのは、これからはもう工業デ ザインではなく、農業デザインなのでは ないかという考えから、農とデザインと のつながりをさぐることがはじまりであ ったという。また、前号はまだ勉強が足り ない状況ではあったが、農にはデザイン として取り上げるべき課題が全部詰まっ ているという感触が強まったこともあり、 本分科会でもさらに追求すべきであると して討議テーマとして提案したという。

各メンバーより、自身の経験の中で農に 関係することや、デザインと農、文化と農 など、農に関する体験や考えをお話いただ いた。そして、各メンバーが感じている農 についての課題を挙げていった。

農に関する現状の課題としては、工業 社会によって、お金さえあれば何でも買 うことができるようになってしまったこ

3. Cultural Proposals for Agriculture Comments by Coordinator Yukio SAKODA

Japanese agricultural products are highly evaluated in other countries. Grapes of Yamanashi prefecture and apples of Nagano prefecture sell quite well in Thailand and Taiwan as delicious and safe fruits even though their prices are three times as much as those in Japan with tariffs and transportation costs. It is less costly to transport "Amao" brand strawberries from Fukuoka to Taipei, Shanghai and Seoul than to send them to Hokkaido. Even though less expensive locally grown strawberries are sold in these cities, some people buy Japanese ones. The image of "safe and delicious" Japanese fruits has spread almost as a "culture."

Japanese food restaurants are increasing in the world. In order to distinguish restaurants that serve genuine Japanese food, a semigovernmental organization was going to rank them. Instead of doing that, it should give guidelines for genuine Japanese cooking and explain cultural background. It is an opportune time also to spread Japanese rice which is the basic item for Japanese food.

Discussion

* Problems in agriculture in Japan today

The following problems in agriculture today were pointed out: 1) As Japan became highly industrialized, people have come to think that they can buy anything from other countries. As a result, agriculture in Japan has lost its strength, lowering the nation's self-supply rate in food. 2) Cities and rural villages are clearly separated. Children in cities have no chance to see how vegetables and rice are grown. 3) Lack of successors in agriculture. Children of farming households today do not want to succeed their parents' occupation because of low and unstable income for hard work and time, and because of the heavy influence of weather and other factors. Thus, there is a

とにより、農文化が損なわれつつあることが挙げられた。そのことが自給率低下の原因ともなっている。また、都市と農村とが区別されているような都市形成にも、農文化低迷の要因があるのではないか。都市で暮らす子どもは、野菜や米がどうやって作られているかわからない。農文化が伝えられないような都市形成に問題があるのではないか、との指摘があった。

また、農の現場にとっては、後継者がいないことも大きな問題である。気候や災害によって収益の不安定な農業、手間がかかり体力を使う農業は現代の若者には人気がなく、農地があっても作物を育てる人材がいないため、休耕田になってしまっているところも多い。

議論を通じて様々な問題が浮かびあがった。とくに、農文化をこれからどのようにして育むべきか、という点が焦点となった。

農を身近にする暮らし方と都市の形成

各メンバーが積極的に発言したのが、 都市でできる農業のあり方である。

戦後、東京は焼け跡となった大地で、食糧を得るために野菜が作られていた。そんな中、野菜を作る楽しさ、食べるものを作れるのだという価値感を見出し、都市でもできる野菜作りを今でも自宅でされているメンバーもいた。

ライフスタイルを見直し、都市でできる野菜作り(ハーブや小型の野菜などから)をしていく生活に、まずはシフトしてみることが農文化の形成に一役を買うの

ではないか。自宅の花壇で花を育てるのではなく、野菜を育てるシティファーマーという言葉も生まれている。そしてさらには、都市と農村とをわけないような生活、自給自足のできる生活や都市形成をすべきではないか。

農業とその担い手の育成

農業のあり方として、手抜き農業の提 案があった。

体力勝負の農業ではなく、手抜きをすることで、農業に携わる人にとっては簡単に、しかも1.5倍の収量を得ることができるという農法の紹介である。このことで、高齢者や女性でも農業をすることができ、また、より安定的な収入も得られるのではないか。農業から離れていった若者世代に農業を選択肢として与えうるものになる。

そして、教育による農文化の発展である。ある自治体では、農業を教える機関がある。農地斡旋を目的とする産業振興のプロジェクト、農業の跡継ぎ問題を解決するためのものであるが、農文化の伝承として有効ではないか。単に生産農家を増やすのではなく、文化を次世代に向けて育むものとしての農学校が紹介された。

農文化を実感するしくみづくり

さらに、できた野菜の食し方について の提案である。

海外でも日本でも、新鮮な食材で料理 を提供する、農地のすぐ隣にあるレスト ランが人気となっている。都市へ食材を 運ぶのではなく、新鮮な食材のもとに人が行くという考え方である。そのことで、その土地の気候風土を背景にした農文化によって育てられた作物のおいしさ、さらにはその土地の文化をも理解することができる。

また、最近の日本では、観光産業と結びついているが、産地レストラン、ブランド野菜、農の見える化(野菜の生産者表示、レシピの記載など)なども新しい動きとしてある。伝統的に行なわれている収穫祭や火祭なども農文化によって形成されているものであり、今でも各地で開催されていることだろう。

こうした農を取り巻く動きや新しい試みにより、農産物がブラックボックスから生まれるのではなく、農文化の断片だけでも伝えられている状況は大変望ましいことである、と今の展開を評価し今後に期待する意見も出された。(矢後真由美)



農の見える化(「農家の台所」恵比寿店)

manpower shortage in agriculture, while the area of unused farmlands is on the rise.

* Growing vegetables in cities

We need to reflect on our lifestyles and begin to grow vegetables and herbs in cities. This may lead us to be more concerned about agriculture, and creating city plans that are compatible with farming.

* Training future farmers

Less labor intensive agricultural methods that can produce higher yields should be devised to encourage women, elderly people and young people to choose to be engaged in agriculture. Educational opportunities on agriculture should be increased. A local government provides educational opportunities for young people who intend to begin farming. This program is meant for training

future farmers but it can also help to convey the culture of farming.

* Mechanism to have a touch of agriculture

Recent movements in Japan include restaurants that serve foods produced in the locality, and the sales of brand vegetables and produce with growers' names and recipes. Traditional village festivals are mostly based on local farming cultures. These are a few opportunities to help people think of agriculture. (Mayumi YAGO)

VOICE OF DESIGN FORUM 分科会

健康・医文化への提言

コーディネータ報告 阿久津靖子

健康・医文化と環境問題とがどう関わ るのかと疑問を持つ人は多いと思う。環 境問題というと、CO2削減、3Rなどと具 体的なことに目がいきがちである。地球 環境の中で、人間を一つの生命体として とらえたとき、そこには我々はどう生き なければならないのか?どう死と向かい 合い、DNAを次の世代につなげていくの か?という課題があり、その課題に個々 が向き合っていく時代を迎えていること を日々感じている。自分の生と死に常に 向き合いながら(とても難しい課題だが) 自然にあるがままに生きるというサステ ィナブルな生き方が21世紀に求められる のではないかと思い、今回のフォーラム に本分科会を提案した。

人の命を救うという第一義のもと、発達した高度医療機器を導入するために、病院は設備やインフラ整備を次から次へと行わなければならない。病院の建物は寿命が30年といわれ、水・電気などの大量なエネルギーを24時間消費する巨大な建造物である。高度医療を支える病院はサイバー化し、人間の修理工場となり、昼夜、医療従事者たちが尊い命を救うために休むことなく働いている。多くの臨床医や看護師の一人ひとりは、人の命と

参加者

阿久津靖子 (コーディネータ,メディシンク企画室長)、栄久庵憲司(日本デザイン機構会長)、犬養智子 (評論家)、藤本清春 (GKダイナミックス)、髙山美幸 (記録,エスケー化研)、田中一雄 (GKデザイン機構)、中越出 (大日本印刷)、今井朝美 (青山学院大学学生)、玉置真知子 (女子栄養短期大学学生)、藤きみよ (女子栄養短期大学学生)

向き合いながら一生懸命だ。人の命だか ら、絶対に救えるとは限らない。でも何 かが起これば訴えられるケースが多く、 彼らは自己防衛のため多くの検査をし、 高齢者に対しても、外科的手術を行い、 命をつなげるものならさまざまな処置を 行う。先端化し巨大化する医療文明の前 で、命(QOL)がどうあるべきかの議論は 二の次となっている。人の生死をあずか る最前線がもっともサスティナブルとい うものからかけ離れている。文明化した 医療環境において、医療側、患者側とも に、経済的にも精神的にも疲弊しつつあ るのではないかと危惧してしまう。人が どう生きるかという視点を今の医療の現 場に取り戻すことが必要ではないか?

日本は健康長寿国である。もちろんそれは国民皆保険制度や医療技術の発達の 恩恵によるところが多いが、元々の食生 活・四季を感じ、海・山の豊かな環境に 育まれた日本文化、足るを知るという思 考性などもまた、長寿国日本をつくり上 げてきたのだと思う。超高齢化と考えれ ばネガティブだが、健康長寿国というポ ジティブな考えに変わる。健康長寿であ ることの文化性を世界に発信し、高齢化 社会に向けての健康・医のための新しい システム開発を世界に先駆けて行うこと こそ、これからの日本のグランドデザインの中で必要なことではないか?

本分科会がその議論のきっかけになればと提案したが、参加者から今の医療や健康の問題の考えが活発に発言され、今後の展開に向けた問題提起の第一歩を踏み出すことができた。

分科会の話題から

今の日本の医療が抱える問題

日本は世界に先駆けて超高齢化社会となり、世界一の長寿大国となる。一人ひとりが、高齢を健やかに過ごすために健康と医療を考えなくてはならない時代が到来している。しかし、健康や医療の話は難しく、自分や家族が病気にならないと、医療と直面することがない。

デザインと医療、健康との関わりについて何をすべきか。情報の扱いや医療費削減には何が必要なのか。幸せに生き、死を迎えるために何が大切か。医療分野に精通するコーディネータとともに、身近な体験や医療と健康についてのさまざまな視点からディスカッションを行った。

4. Cultural Proposals for Health and Medical Care Comments by Coordinator Yasuko AKUTSU

Hospitals today are making strenuous efforts to upgrade their medical equipment in an effort to save human lives. Thus, hospitals offering highly advanced care have become like cybernated human repair factories. Medical personnel work day and night to save lives. Being wary of the possibility of being sued in case of trouble, they examine patients a number of times so as to be able to defend themselves in possible future malpractice suits. They apply surgical operations and other kinds of life prolonging treatments even to elderly patients, giving less attention to the question of the quality of their life.

The Japanese enjoy healthy longevity thanks to the national health insurance system and advanced medical technology. Even before these modern developments were achieved, Japanese culture

including diet, the appreciation of seasonal changes in nature, and the way of thinking "enough is as good as a feast" has contributed to helping the nation stay healthy for long. Taking these things into account, we need to develop a new health and medical care model for the benefit of aging populations in the world.

Discussion

* Urgently needed medical information sharing system

Information on our physical conditions should belong to us. In case of emergency, we can give the information to medical staff at any hospital, based on which they can proceed with their treatment. For that reason, individuals should carry their medical information. Medical facilities should share patients' medical information, then, repeating the same examination at a second hospital can be avoided and medical expenses may be reduced. The government is promoting information sharing, however, it has not been successful

早急にすすめたい医療情報の共有化

自分の体の情報は本来自分のものである。カルテは病院にあるが、その情報は、本来なら自分が一番知っていなくてはならない個人情報である。自らの健康状態や情報を持つことができれば、緊急時の新規病院での処置でも、各自の体質や体の状況を医師に伝えられ、治療が進められる。そのためには、個人による情報所有や施設同士の情報共有が必要である。

国策として保健医療情報の共有化がいわれているが、インフラ整備の課題や医療業界の情報の閉鎖性の壁がある。

海外の例では、韓国のサムスン病院では、外からアクセスして情報を入手でき、スウェーデンはカードに医療、買い物、税金情報が全て入っている。医療情報を共有化することで何度も同じ検査をする必要もなくなり、自分の健康に自己責任をもつことができ、医療費の削減にもなる。

自然な生命体として人を扱う医療に

高度医療の進んだ病院は、病を治して も人を治すという視点に欠ける。

日本の看護は、元々ホスピタリティが一番高いといわれていたが、今は技術の発達からデータで判断するようになっている。先端医療で病を治すことは重要だが、高齢化社会を迎えて、人の全体を診て未病の状態をつくることも必要課題となる。未病の状態をつくるには、病院へのおまかせ医療ではなく、それぞれが自分の体と向き合うこと。それが問題解決につながり、サスティナビリティにつながる。

自然治癒力・五感で感じる空間の展開

医療行為だけに頼るのではなく、自然 治癒力を培うこともこれからの医療に求 められる。

人の五感を刺激する医療空間が、自然 治癒力を高め早期回復をうながす。アメリ カでは、光と音にどのような効果があるか という研究・evidence based designが進 められているという。我々も、医療空間を 機能の箱とするのではなく、光や風、風土 を五感で感じる空間を検討した。

〈色彩〉白い壁の画一的な病室ではなく、 患者の嗜好にあわせた病室にすれば、リ ラックスでき、感覚から治る方向に進む のではないか。

〈音〉病院は雑音がなさすぎである。糖尿病で聴覚不自由な人が、細いイヤホンがつくられたことで、音楽を聴けるようになり癒された例がある。癒される音には、台所の音などの生活音がある。

〈匂〉痴呆者の医院は臭気が多く、患者も その臭いに慣れてしまっている。これも 病が回復しない要因ではないか。

〈風〉視覚が不自由でも、脳で素敵な空気 を感じることができる。

〈手〉「手当て」というように、人の手は病気を治す。

医療を「食」文化から見直す

医食同源という言葉がある。

今、食べ物で不幸になっている人が増 えている。日本は、健康的な食環境であ ったはずだが、環境変化による野菜や肉、 魚を食することや、自動販売機で売られ ているペットボトル入りの水を飲むことで不健康を招いているのではないか。また、病院食は食事を額面上合せるだけで、プラスチック容器など見た目を軽視している。食欲が失せる要因となり、健康に通ずるはずの「食」になっていない。食と食を取りまく環境を見直すことで健康が培われ未病につながる。健康に生きることが医療費と予算の削減にもつながり、環境に寄与することにもなる。

今、問われる死生観

医療技術の発達によって「延命」か「死」 かを判断する場が増えていく。このとき に自分自身の死生観が問われる。死に 直面したとき、物理的に医師以外は何も できないのか、精神的な意思からは?自 分らしい「死」を迎えるために備えることは、今をどう生きるかにもつながる。

文明論に終わらないために

健康になるため、病気にならないための未病医学が大切であり、医療を予防医学として考えなければならない。情報共有を行い、自分自身の体に責任と権利を持つこと。社会のシステムとして生命体を考えて評価しないと、医療はどうあるべきかという文明論に終わってしまう。

高齢化社会を迎える私たちが、医療・健康を日常の出来事としてとらえ、自然な生命体として自分の生死がどうあるべきなのか、健康・医文化を考える必要がある。(髙山美幸)

due to delays in infrastructure development as well as exclusivity among the medical community.

* Medical care to treat patients as a whole

It is necessary to treat specific diseases with advanced medicine. What is more important is to examine patients holistically, and to keep them in a state of "overall good health." To be in this state, individuals should take good care of their own health.

* Natural healing power and supporting spaces

Spaces that stimulate the five senses help enhance patients' natural healing power and promote faster recovery. Today, the walls of hospital rooms are uniformly colored white, but the color can be changed to be patient-friendly, and sounds and aroma that help patients relax can also be added.

* Reviewing health care from foods

The nutritive contents of vegetables and other food materials have undergone changes due to changes in the production environment. People's eating habits have also changed. Serving on plastic dishes in hospitals may act to lower patients' appetite.

* Views on death

Increasingly, as medical technology has advanced, medical personnel are forced to determine whether to "prolong the patient's life" or to "allow them to die naturally". We, individuals need to have a clear view on death and on how we wish our final days to be spent. This will lead us to consider how to live today in order to end our life as we wish. (Miyuki TAKAYAMA)

VOICE OF DESIGN FORUM 分科会 環境文化教育への提言

コーディネータ報告 鳥越けい子

教育は人類の特徴であり、学び伝えることは文化の基本である。その教育活動は今、「学校」を中心に「教室」に象徴される、リアルな環境から切り離された「制度化された空間」で展開されている。そのため(「デザイン」に関する教育も含め)教育活動の現場で、生きた環境を実感することが困難になっている。

一方、教育活動のなかで環境をそのテーマに掲げてきたのは「環境教育」。だが、その活動実態も「理科」や「生物」をはじめとする自然科学的な領域に留まりがちで、文化活動との関連をもって展開されることが少ない。

今回のフォーラム開催に当たり、事務 局より「環境文化教育」というテーマ担 当を拝命したとき、私が意識したのは、 こうした問題だった。

その解決のために必要なのは、教育活動一般に「場の感性」を取り戻し、「環境教育」の領域において文化や感性の問題を扱うようにすること。同時にまた、理系と文系に分かれた研究活動全体に、地域や土地に根ざした連携を取り戻し、知性と感性、芸術と学術、さらには信仰と日常、自然と人間との間にいつのまにか築かれた部厚い壁を取り除くことだろう。

参加者

鳥越けい子 (コーディネータ, 青山学院大学教授)、佐藤典司 (立命館大学教授)、久保田秀明 (凸版印刷)、天内大樹 (記録, 日本学術振興会)、菊池公一郎 (視案設計集団)、村島正彦 (studio harappa)、山田晃三 (GKデザイン総研広島)、佐野寛 (モスデザイン研究所)、鷲野宏 (鷲野宏デザイン事務所)、わたなべひろこ (インテリアテキスタイルデザイン)、南條あゆみ (日本デザイン機構)

このような考え方から、私は先ず、同様の考え方で準備中の「〈場の感性〉の蘇生にむけて」と題する公開シンポジウム(日本学術会議と富山県立山博物館との共催)と、その背景にある立山の土地の力、それを踏まえた立山博物館を中心とする新たな文化創造の試み(「布橋灌頂会」の創造的復活)を「環境文化教育」の事例として紹介した。その後、この事例と「環境文化教育」というテーマの双方に対して、参加の方々に意見や感想を自由に述べていただいた。

参加者からはそれぞれに、多岐にわたった興味深いコメントが開陳された。が、共に議論を展開し、さらに深めるためにはやはり、当日の会場のような空間とは異なる何らの実感が伴う環境に共に身を置き、体験と共に学ぶワークショップ活動等を開催する必要があることを、今後の課題として意識することにもなった。

分科会の話題から

「環境文化教育」というタイトルの下で行われた議論は、①環境教育に文化をどう盛り込むか②文化教育に環境をどう盛り込むか(以上は村島正彦氏の教唆に

基づく)③教育そのもののあり方、以上 3点に整理できる。特に③は発言者の信 念がぶつかり、議論の混乱を招きやすい と一般に言われる論点なので、当日議論 の整理は難しかったかもしれない。

コーディネータの鳥越けい子氏は、布 橋灌頂会の再興を環境文化教育の一例 として、ホーリスティックに五感で《実 感》することを冒頭に掲げたが、討議と して全体性から入るべきか、視覚など個 別の議論や職業の専門性から全体性へ と結ぶかは迷うところだった。

1. 環境教育に文化を盛り込む

「文化」とデザインを重ねる議論の中では、デザインのかっこよさで人々を動員する必要がある点、またそれが刺激を増幅するのではなく、人間の生活環境を取り囲むものとして考える必要などが指摘された。文化そのものについても、環境を論ずる際にありがちな人間と動物という二分法ばかりではなく、雄の文化と雌の文化の両者を確立させる必要があるとの主張もあった。

「文化」と文明を対置する議論では、五 感を通じて様々に、例えばその場の成り 立ちを参加者に気付かせる行為の好例と

5. Proposals for Environmental Cultural Education Comments by Coordinator Keiko TORIGOE

Education at present is conducted in a classroom setting which is separated from the real world situations of what is being taught. Environment education in school is given in biology and other natural sciences, and it is hardly connected with cultural activities including "design".

What is needed is to restore a "real sensation of actual environmental situations" in education in general, and to deal with culture and aesthetics in environmental education. At the same time, linkages between the natural sciences and the humanities in academic activities should be provided based on actual environmental situation. Thick walls, which have been built over the years between intellectuality and sensibility, arts and sciences,

religious faith and daily activities, and natural world and human world, should be removed.

As an example environmental cultural education, I presented a trial in Toyama prefecture to conserve creatively an old ritual to provide blindfolded women with "simulative mountain climbing activities" to enter Mt. Tateyama, which was closed to women in olden days. I, together with participants, found it necessary to have workshops to put ourselves in an environment where we could have real feelings.

Discussion

* Incorporating culture into environmental education

The need for attracting people by surrounding them with good design in their living environments was pointed out. Inspired by the traditional practice in Mt. Tateyama, some advocated the need for





新たに復活された布橋灌頂会(立山博物館のある 立山町芦峅寺で、入山が計されなかった女性たち のため江戸時代に行われていた「立山登拝疑似体 験」としての儀式)。写真は、2009年9月27日実施 の様子。

- 左:白布で目隠しをして布橋をわたる女人衆。
- 右:「天の浮橋〈あめのうきはし〉」とも呼ばれる布 橋はこの世とあの世を結ぶ。

して茶道が挙がった。周辺の笹、室内の 湯、茶碗や掛け軸や花、茶室そのものな ど人工物というハードウェアと、そこで 過ごす時間というソフトウェアの両立 が、ここでの議論にマッチした。しかし ここでも、刀を置いた武将が茶を回し飲 みする雌的世界が茶道に浸透していると の指摘から、文字通りの雌雄の原理の確 立が必要かどうか議論が湧いた。

「文化」にアキバ的なるものを含めた際、もの(道具/フィギュア)に命を見出すフェティシズム、またもの自体よりも、そのものに我々が付与するコンテンツ内容(道具の来歴/キャラクター)が重要な点などがアキバと茶道に共通する。グローバリズム下の資本という雄的な経営原理による開発(タワーマンションなど)に対抗し、土地や具体的な場所と連関した「文化」を語る必要はありそうだが、そこで雄的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理が別の形で必要なのか、雌的原理の全面化を言祝ぐべきかは、今後の思考が待たれる。女性が入山を禁じられたというジェンダーの緊張関係が冒頭の布橋灌頂会を生み出したのは事実だろう。

2. 文化教育に環境をどう盛り込むか

「環境」を「地球」という茫漠とした範囲に追いやらずに、住んでいる環境への意識として取り戻そうという議論は、基調講演で強調された《実感》につながる指摘だろう。同様に「環境」を人間を取り巻く対立的な存在として以上に、人間との連続性の下に捉える必要も指摘されたが、デザイナーとしての職能からはものを通じ、ものとの連続から「環境」を捉えるべきとの意見もその前に出されていた。この点の議論はなされなかったが、「環境」との間にものが介在することで、人間が環境を《実感》することにどう効果があるか、検討の価値はある。

環境、あるいは文化という語を教育につなげる際には、つい保守的な語り方をしがちで、重要な事柄ではあるものの、米一粒をもったいないと思えという教訓に押し込められがちである。しかし人口構成からは50年で破綻し、経済的価値からは40年維持されればよいと思われている湾岸地域などのタワーマンションの建設を推進しているパッチワーク的な都市

計画行政、制度の前に、そうした教訓は ささやかな力しか発揮しないのではない か。先ほどからの雌雄の原理の両立とい う議論からなされた、破壊を伴う新たな 環境を考えるべきとの指摘は、《実感》 へ誘導する切っ掛けが善かれ悪しかれ増 えているという認識とセットで、この点 に接続して考えられるだろう。

3. 教育そのもののあり方

前年の「こども」分科会同様、理論よりも体験や実践の蓄積が必要だ、また啓蒙よりも造形や精神を通じた《実感》の共有が重要だという指摘、また啓蒙よりも伝承として、従来(近代以前?)重要とされてきた教えを引き継ぐべきとの指摘が大勢を占めた。刺激を増幅したアニメ番組にベビーシッターをさせては育児として問題だとの指摘もあった。しかし、触覚からテキスタイルの重要性を説きながら、生身の人間は理論で解決できないとする、まさに雌雄原理の整然とした両立を求めるような"男文化"的な議論を転覆する議論も飛び出した。(天内大樹)

defining gender-based culture. Mobilizing the five senses is essential in environmental education, and tea ceremony was cited as a good example of a cultural activity to be associated with environmental education, as it involves the appreciation of nature, art, tea room and tools while enjoying conversations with participants.

* Incorporating the environment into cultural education

When we consider "the environment," we should limit our thoughts to the environment of the place we live in rather than expanding our thoughts to the "earth" as a whole in order to have a realistic sense of our environment. Considering the environment or culture in terms of education, we tend to be conservative. For example, we tend to end up with a lesson "even a grain of rice is precious, so deal with it with care." But this kind of lesson can exert little

influence on the contemporary society when large scale urban development projects, which well be destroyed half a century later, are destroying the environment. Considering a new environment that accompanies destruction should be linked with the increasing occasions to lead people to have a "real sensation" of an environment.

* Education in general

Hands on experiences and practices rather than theories should be accumulated. Having a "real" feeling through making things with one's hands and going through mental experiences is important. Carrying on teachings which were considered essential in the past is important. While some advocated education emphasizing the five senses, others favored education seeking a logical way of thinking. (Daiki AMANAI)

事務局から

2010年度通常総会報告

去る5月27日(木) 国際文化会館(東京・ 六本木) にて2010年度通常総会を開催し ました。水野誠一理事長、栄久庵憲司会長 の挨拶後、1) 2009年度事業報告・収支報 告ならびに、2) 2010年度事業計画案・収 支計画案が承認されました。

終了後、VOICE OF DESIGN FORUM 「環境問題を文化で解く」を開催しました。



ウェブサイトリニューアルその後

昨年10月にリニューアルしたウェブサイト「VOICE OF DESIGN」。「100人の声(日本デザイン機構会員のブログ)」を中心に、それぞれの声を発信するサイトとして展開しています。8月には、誰でも参加できる新しいコミュニティサイト「オープンフォーラム」を公開しました。フォーラムでの討議やその他のデザイン課題を、より多くのご意見のもとに継続的に考える場を目指します。

編集後記

VOCE OF DESIGN FORUM雑感

文化のパラメータ、身体性 基調講演「環境を考える」で栄久庵会長は、ご自身が使われている「緑色の杖」と「緑色の車椅子」で話しを切りだされた。

第1分科会「都市モビリティ文化」で文化的モビリティにふさわしいものとして地球温暖化をもたらした自動車などの20世紀型移動道具を人間のエネルギーに置き換えるものとしての自転車が議論された。「緑色の杖、車椅子」はさらに人間へ接近、むしろ一体化した道具と言えよう。この杖、車椅子が自由に使える都市、社会が文化のパラメータと言われた。我々日本人はさらに世界の人びとは、環境問題に対してどのようなパラメータを持っているのだろうか。

制限が生む創造性 またさらに「制限」が 生む創造性、例えば俳句は文字数の制限 によって見事な文化をつくりだしている、 とも述べられた。確かに日本の環境技術 は規制によって高度化してきている。そ れをどう文化に変身させるかが課題であ る。限られた資源・地球の中でこそ発揮 される創造力、それがデザインのミッションであろう。

実感の復権 枕草子「春は曙…夏は夜… 秋は夕暮れ…冬はつとめて…」を持ちだされ「実感」というキーワードも出された。第2分科会「地域エネルギー文化」では、エネルギーを実感できる「見える化」という議論がなされた。第3分科会「農文化」の「おいしい日本のごはん」もまた実 感の世界である。第4分科会「健康・医文化」での「在宅死」の議論も実感できなくなった医療の問題でもある。

知行合一 そして基調講演の結びの「知行合一」はまさに第5分科会「環境文化教育」のテーマである。《教育活動に一般に「場の感性」を取り戻し、「環境教育」の領域において文化や感性の問題を扱うようにすること》とはまさにそういうことである。

基調講演、分科会を通じて出されたキーワード「身体性」「制限」「実感」「知行合一」、これらは「環境を文化で解く」切り口である。20世紀文明がつくりだしてしまった人間のスケールを越えた世界を、例えば CO2排出量25%削減という制限目標に対し、環境問題やエネルギーを実感させる身体性の復権を目指すことが求められる。そうして考えた知を足下から実行すること。そのためのデザイン、これらがこのフォーラムをきっかけに展開されればと思う。(伊坂正人)

VOICE OF DESIGN VOL. 16-1 2010年8月31日発行

発行人/栄久庵憲司

編集委員/追田幸雄(委員長). 鳥越けい子.

薄井滋. 天内大樹. 矢後真由美. 阿久津靖子. 南條あゆみ(事務局)

翻訳/林 千根

発行所/日本デザイン機構事務局 〒171-0033

東京都豊島区高田3-30-14山愛ビル2F

印刷所/株式会社高山

VOICE OF DESIGN Vol.16-1

Issued: Aug. 31. 2010

Published by Japan Institute of Design

3-30-14 Takada,Toshima-ku,Tokyo 171-0033 Japan Phone: 81-3-5958-2155 Fax: 81-3-5958-2156

Publisher: Kenji EKUAN

Chief Editor: Yukio SAKODA / Translator: Chine HAYASHI Printed by Takayama inc.

From the Secretariat

Annual meeting for FY2010

JD annual meeting for FY2010 was held at the International House of Japan in Tokyo on May 27, and approved 1) the activity and financial reports for FY2009, and 2) the activity and budget plans for FY2010.

After the meeting, Voice of Design Forum was organized under the theme "Cultural Approaches to Solve Environmental Issues."

Renewed JD Website

"Open Forum," a community site will be added to the JD website in August to continuously discuss the themes of Voice of Design Forum and other design topics.

Editor's Note

Chairperson Ekuan referred to his green cane and green wheelchair, tools that he cannot separate from him as he travels. Bicycles were evaluated as a tool to replace fossil fuel with human energy. Creativity is born from "limitations." It is the mission of designers to display their creativity in the limit of resources on the earth. Having a real sensation is important. By visualizing energy generation and use, people will have a real feeling to develop their local energy culture. Delicious Japanese rice is also a realistic feeling that people have. Death at home is a problem of medical care that people today can hardly experience, and have a realistic sensation of death. Putting one's knowledge into practice should be the core of environmental education. It would mean "to deal with culture and sensibility in environmental education" and "to restore the senses of